



ほうなん

令和8年度 9月号

令和8年8月31日
杉並区立方南小学校
03(3322)7661

「過剰に反応しない」～子どものために、まず理解することから～

校長 吉岡 光弘

長い夏休みが終わり、子どもたちの元気な声が学校に戻ってきました。二学期は、運動会や音楽会など、多くの行事を通して子どもたちが大きく成長する学期です。その一方で、夏休み明けは生活のリズムや環境の変化から、心や体に疲れが出やすい時期でもあります。文部科学省も、長期休業明けは子どもたちの小さなSOSを見逃さず、学校・家庭・地域が連携して見守ることの大切さを呼び掛けています。

私は、校長として、そして一人の人間として、大切にしている考え方があります。それは、「過剰に反応しない」ということです。何か問題が起きると、私たちは驚いたり、不安になったり、腹が立ったりします。しかし、その瞬間の感情だけで判断してしまうと、本当は見えるはずだったことが見えなくなってしまうことがあります。

若い頃の私は、物事を早く判断し、早く結論を出すことが良いことだと思っていました。しかし、その考え方を大きく変えたのが、スティーブン・R・コヴィー著『7つの習慣』で紹介されているエピソードです。地下鉄の車内で、子どもたちが大声で騒いでいるにもかかわらず、父親は何も注意をせず座っています。周囲の人が声を掛けると、実は子どもたちの母親が亡くなったばかりで、父親自身もどうしてよいか分からない状態だったことを知ります。その一言で、それまで迷惑な親子にしか見えなかった光景が、まったく違うものに見えたという話です。この話は、私に「事実の一つでも、その背景を知ることで見え方は大きく変わる」ことを教えてくれました。それ以来、私は学校でも、「まず話を聞く。」「まず理解しようとする。」という姿勢を何より大切にしています。

子ども同士のトラブルやいじめ、不登校など、学校では様々な課題が起こります。しかし、目の前の行動だけを見て判断するのではなく、「なぜ、その行動になったのか。」という背景を理解することが、本当の解決への第一歩だと考えています。

もちろん、「過剰に反応しない」とは、問題を軽く考えたり、見過ごしたりすることではありません。一度立ち止まり、冷静に事実を確認し、子どもにとって何が最善なのかを考え、丁寧に対応することです。

子どもたちにも、始業式で同じことを伝えました。困ったときには、まず自分で考え、自分なりに挑戦してみる。その経験は、自立につながります。一方で、「一人では難しい」と感じたら、先生や友達、保護者、地域の方など、信頼できる人に相談する。相談することは、決して弱さではありません。自分を知り、よりよい方法を見付けるための力です。近年、レジリエンス（困難を乗り越える力）の研究でも、安心して助けを求められる環境が、子どもの立ち直る力を育てる重要な要素であることが分かっています。

一学期にも、このことを実感する出来事がありました。朝、登校をためらい、校門の前で立ち止まってしまった児童がいました。その時、「朝の居場所」と「ぼかぼかルーム（校内別室指導）」を担当してくださっている地域の方々が、時間をかけて子どもの話を聞いてくださいました。子どもは少しずつ気持ちを落ち着かせ、自分の足で学校へ入ることができました。私は、この姿に方南小学校のよさを感じました。

そして、この夏にも、地域の力を改めて感じる出来事がありました。本校を会場に、学校支援本部と地域の皆様が力を合わせて、「第10回 方南盆踊り大会」が開催されました。学校の校庭が地域のお祭りの会場となり、子どもから大人まで多くの方々が集いました。その中には、普段の学校生活ではなかなか会えることのできない子どもたちの姿もありました。友達や地域の方々とふれ合い、楽しそうに過ごす子どもたちの笑顔を見て、私は改めて、「地域もまた、子どもたちの大切な居場所なのだ」と感じました。

学校に足が向きにくい時があっても、地域にはその子を知り、声を掛け、温かく見守ってくださる大人がいます。そして学校も、授業を受けるだけでなく、地域の人と出会い、つながることのできる場所になります。子どもには、一つだけではなく、いくつもの居場所があってよいのだと思います。学校、家庭、地域。それぞれに、自分を気に掛けてくれる人、「困った」と言える人、「一緒に考えよう」と言ってくれる人がいる。そんな環境の中で、子どもたちは少しずつ「相談する力」を身に付け、困難を乗り越える力を育てていくのではないのでしょうか。

学校と家庭、そして地域は、「すべては子どものために」という同じ願いをもつ一つのチームです。私は、「困ったときに相談できる子ども」を育てたいと思っています。そのためには、まず私たち大人が、過剰に反応せず、相手の話に耳を傾け、「一緒に考えよう」と言える存在でありたいと思います。

二学期も、学校・家庭・地域が手を取り合い、子どもたちの「自分で考える力」と「相談する力」の両方を育みながら、一人一人の成長を支えていきたいと思っています。

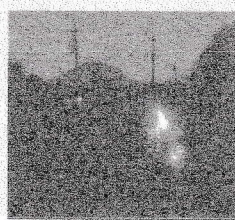
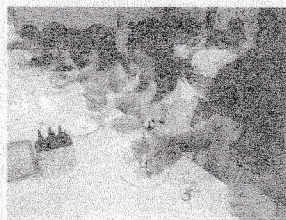
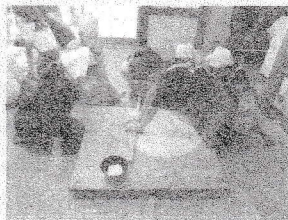
5月から準備を進めてきた移動教室。学年みんなで決めたスローガン。

「青春を楽しみながら 爆裂に学んでまいります」

～安全・努力・助け合い～

子どもたちが自分の力で、また仲間と協力し合いながら活動を進めることができた移動教室でした。生活班の係では自分の役割に責任をもち、みんなで仲良く楽しい移動教室になるようにと準備しました。うまくいかないことがあっても、気持ちを切り替えて取り組む姿も見られ大きな成長を感じました。自然の中での活動は、学校ではできない体験や楽しさもあり、わくわくする子どもたちの表情が微笑ましかったです。

2学期は、スポーツフェスティバルや音楽会など5年生の活躍がたくさん見られると思います。5年生みんなで、共に大きな行事を経験して、6年生へ向けて成長して行ってほしいです。



少人数算数指導について

算数少人数指導の担当教員は、同じ日に複数の学年の授業を行います。そのため、

「この単元で学習した内容は、何年生の算数のどういうことにつながっている」

「前の学年で学習した何がもとになっている」ということが特に分かります。算数少人数

指導の担当と各学年の担任が、事前に確認したり授業をふり返ったりしながら児童がつまずく個所や原因、改善策を共有し、指導のポイントを確認して授業を行っています。

また、児童自身がつなかりに気付けたときは、学ぶ楽しみがぐっと増えるチャンスにもなります。児童自身が学び方を身に付け、自分で課題解決していける力を身に付けられるような工夫をたくさん取り入れていきます。視覚的に分かりやすいデジタル教材も多用しますが、実際に体験したことは記憶

に残りやすいという具体物活用のメリットも活用したり児童のノートを手本としたりしながら指導を日々進化させていきます。

